

②1 『辛いから』

ミチが旅立つ日、ちえは八つ半(午前三時頃)には、もう起きだしていた。

竈に火を入れ、暫くその明かりの中にうずくまっていた。僅か三日の間だったけど、兄妹がいなかったちえには、ミチと過ごしたこの三日間が、妹と暮らした毎日のように思えて懐かしかった。

これまで家に帰るのが楽しかった事なんて一度もなかった。それなのにミチが待つていてくれると思うと、仕事の帰りの夜道をいつのまにか小走りに駆けていた。

暗闇の中に横たわる長屋のちえの家の障子だけが、行燈の明かりを映してほんのり明るい。

その灯色は暖かく、ちえの胸にはじけそうな幸せを呼び起こすのだった。

ちえが手際よく準備した朝の膳に、掌くらいの鯛が乗っている。怪訝そうな顔を上げたミチに

「今日の出立、めでたいじゃないか」そう言ってちえは微笑んでみせた。

この辺りでは魚はすこぶる高価だ。増して小振りとは言え鯛ならなおさらである。昨日の内に、勤め先の茶屋に頼んでおいたものだろう。

ミチは精一杯の感謝の気持ちを込めて「いただきます」と箸を取った。

「楽しかったねエこの三日。こんな気持ちで暮らしたことなんて今まで無かったもんね。これからは、あたしもまつきらな気持ちで生きて行けそうな気がする。これもミチさん、みんなあんたのお蔭さ。でも、もう会えないんだろう？ 江戸に着いて、それから故郷に帰ってそれつきりになってしまふなんて・・・ね。ハハハ、旅立ちの前に愚痴を言っちゃあいけないね」

「送って行かないよ。辛いから。戸口で見送らせてもらうよ」

そう言ってちえは、開け放った入り口の柱にもたれかかって、小上りに腰をかけワラジの紐を結んでいるミチを見ていた。

ミチは、どうおちえの気持ちを振り切って戸口を出ようかと思索しながら立ち上がったところへ、おふでが駆け込んできた。

鏡餅のように丸く白い顔に変わりはないが、今日は神妙な表情を浮かべている。

「行ってしまうんだって？ 仕方が無いけどさみしいね。元気でいてくれよ」

「有難うございます。鱈のだしが利いた煮物、本当に美味

しかった。また食べたいです」

「来てくれたらいつでも作るよ。私もだけど、おかつさんも待ってる。今朝は商売ものの野菜の仕入れに行つててミチさんを送れないけど、よろしくって言つてた」

ちえの気持ちは分かり過ぎるほど分かつている。二人だけの別れは少し重荷だなど思つていたところに、おふでの乱入のお蔭で気持ちが軽くなつた。

ミチは二人に交互に頭を下げ、敷居をまたいで外に出た。おちえは、うつすらと微笑んでいるように見えるけど、目が泳いでいた。

長屋に平行して流れる川岸の茂みには、まだ夜の名残が執拗な闇を残していた。明け初めた空の色は、長屋の板葺屋根や、西側の木立を明るく染め始め、初夏の、まだ夜気を含んだ風が爽やかだった。

二棟めの長屋を過ぎるところで振り返つた。おふでが手を振っている。おちえは、同じ姿勢で柱に寄り掛かつたままこちらをみていた。

その姿が少しすねているようにも見えて、ミチはおかしかった。

町を外れた所で道が二手に分かれた。左に進めば、大聖寺川に沿つた、来るときに通つた道。右はどこに行くのだろうか。

誰か尋ねる人は居ないかしら、と辺りを見回した時、視界の端でちらつと人の動く気配がした。振り返つてみたが、朝

が早い通りに人の姿はなかった。

それでも、と思ひ視線を凝らしてみると、半町余り先の灌木の茂みの隙間に着物の裾がのぞいていた。

「あの着物の柄・・・あら、おちえさんじゃないの」とミチは気付いた。

辛いから送つて行かないよ、と言つていたはずなのに、こつそりと後をついて来ていたのだ。

柱に寄り掛かつたままの少しすねたような態度といい、子どもっぽい可愛らしさに思わず引き返しておちえを抱きしめたいと思つた。

だが、その思いをぐつと飲み込むとくるりと踵を返し、右の道に向かつて歩を早めた。

恐らく分かれ道に立つてこちらを見ているだろうが、ミチは振り返らなかつた。辛いから。